

アフリカの経済発展とアジア

大きい中国・ASEANの役割

三木敏夫

二〇〇八年五月東京で第四回アフリカ開発会議（TICAD）が開催された。同会議の主要目的はいかにアフリカ諸国の貧困を改善するかにある。サブサハラ以南（北アフリカ諸国を除くアフリカ諸国）の人々の約四割が一日当たり一ドル未満で生活する貧しい日々を強いられているが、グローバル経済から取り残された停滞のアフリカ地域が二〇〇三年以降五%以上の経済成長を記録し、インフレ率も一%台の低率で推移している。遅まきながらグローバル経済に組み込まれ、テイクオフを開始した。二〇〇八年の経済成長率は六%台にのることが予測されている。この経済成長を支えているのが第一に国際金融資本構造の変化による資本の流れが変わったことと、第二に南々協力の拡大と中国やマレーシアなどのASEAN諸国との経済交流が拡大していることが指摘できる。

1、なぜ成長を開始したのか

二一世紀に入りなぜ停滞のアフリカが成長を開始したのか。その要因として東西冷戦構造の

崩壊後、ASEAN諸国、BRICSなどの新興諸国の経済成長に触発され、グローバル経済にアフリカ諸国が組み込まれたことである。また、アフリカ五三カ国の一人当たりGDPは一〇〇〇ドル前後に達したものと推計されている。中国では一〇〇〇ドル以上に達したとき消費に弾みがつき高度成長期を迎えており、アフリカ諸国の経済成長に期待が持たれる。

二〇〇六年以降の原油価格の高騰に象徴されるように、アフリカ諸国には国際経済情勢を左右する鉱物資源やエネルギー資源が豊富に埋蔵されている。原油の賦存量は世界埋蔵量の約十%であり、この外、金、プラチナやダイヤモンドの貴金属に加えレアメタルが豊富にある。特にアフリカ諸国の中でも原油輸出の経済成長が高い。ASEAN諸国が外資主導型輸出志向工業化であったようにアフリカでは資源主導型経済発展の展開である。

輸出鉱物資源の中にはアフリカ地域にしか埋蔵されていない資源も多い。ステンレスの原料となるレアメタルであるクロム鉱は、世界埋蔵量の九五%が南部アフリカ地域、とりわけ南ア

フリカ共和国に賦存している。ボツアナではプラチナ、ニッケル、コバルトなどのレアメタルが豊富に賦存している。こうしたレアメタルがアフリカ諸国に多く埋蔵されているのが大きな特徴である。レアメタルの消費量は少ないが自動車や液晶テレビなどの家電製品や工業製品生産のための触媒として必要不可欠な鉱物資源である。ただ輸出に占める原油輸出比率が高いことは、価格バブルがはじけたときのモノカルチャー経済の脆さもあり、持続的に経済成長を続けるか、もう少し動静をみていかなければならない。

2、南々協力の活発化

BRICSなどの新興諸国の台頭により、国際的な投資資金の流れに変化が現れ、アフリカ諸国に先進国のみならずBRICSやマレーシアなどのASEAN諸国から直接投資が流入し始めたことである。特に中国によるアフリカ諸国の資源開発投資が顕著である。マレーシアでは一九八〇年代にマレーシア南々公社（MASSCO）を設立し、アフリカ、南米やアジア地域への投資と経済協力を積極的に展開している。

これまでの国際的な投資資金の流れは先進国間が主流であり、先進国から発展途上国に直接投資が流入する構造であった。ところが一九九〇年以降タイ、マレーシアなどのASEAN諸国や新興諸国に加えて、原油価格の高騰により経常収支黒字が大幅に拡大した中東産油国からの投資が活発化し、国際金融資本市場でのその

存在感を一気に高めていることである。因みに中東産油国などの二〇〇七年の原油輸出額は一兆六〇〇億ドルにのぼると推計されている。こうした豊富な石油輸出収入を背景にUAEやサウジアラビアなどの政府系ファンド（SWF）によるアフリカの資源開発への投資活動が活発化している。即ちイスラム金融の台頭である。

イスラムマネーは国際金融資本市場を震撼させたサブプライムローンで損失を被ったシティグループ、モルガンスタンレー、メリルリンチ、ベアスターンズなどの資本金増強に利用され、国際資金の流れを変える契機となった。

イスラムマネーは先進国にかわりインド、中国、ベトナムやマレーシアのインフラ整備プロジェクトに積極的に投資されている。また、アジア地域では日本やアジア開発銀行に代わりアジアのインフラ整備の主役になりつつある。加えて中国、マレーシアやインドなどのアジア諸国から中東アフリカ諸国への投資も活発化しており、こうした南々協力がアフリカ諸国に拡大し、経済成長を押し上げ、南々協力の恩恵を受けている。

中国は一九七〇年代、一九八〇年代にタンザニア、ザンビアやアンゴラなどのアフリカ諸国の社会主義化を支援するため軍事経済協力を推し進めた際、構築した太いパイプをもとに、アフリカ諸国との経済関係を強化している。中国の狙いはかつての社会主義の世界輸出ではなく、アフリカに埋蔵されている豊かな鉱物資源

の確保にある。例えば中国は銅やコバルトなどの資源が賦存しているザンビアや産油国であるアンゴラ、ナイジェリアやスーダンに資源開発のための投資を展開している。同時に中国は政治目標としてアフリカ諸国との経済関係強化のため雑貨や食品加工分野への投資も活発に行っている。加えて二〇〇八年のTICADに先駆けアフリカ四八カ国の首脳を招待し、積極的なアフリカ外交を展開している。

アフリカにおける消費財分野への中国投資の拡大は、経済発展が目覚ましい中国市場への安価な製品の供給地としてアフリカ諸国をみていることにある。東アジアにおける雁行形態的経済発展がアフリカ諸国にも波及していることを物語っている。つまり中国がアフリカ産油国から原油や消費財を輸入し、安価な工業製品をアフリカに輸出する南々貿易の拡大にほかならず、国際貿易構造が変化してきている。二〇〇六年のアフリカから中国への輸出は一九九五年の十二倍に拡大しており、中国とアフリカの経済関係の緊密度がうかがわれる。米国一極のグローバル化から同時多発的経済発展に世界経済が一步踏み込んだことを意味する。

3、手本となるASEANの経験

インドシア半島ではベトナム、ラオス、タイからミャンマーに至る東西経済回廊が構想され、道路建設が進められている。同回廊は輸送コストの軽減と関係国の経済活動を刺激するものと期待されている。アフリカでも同様にモザ

ンビークから始まるナカラ回廊（ナカラ・ナンブリーバユーを経てマラウイ、モザンビークに至る）が構想されている。同構想を推し進めるためにベトナムはアジアの経験を伝えるため、モザンビーク政府関係者を東西経済回廊視察のために招待した。ナカラ回廊の道路整備を通しFTZやEPZなどの経済特区、工業団地の開発、通関システムの改善や地場産業の育成などのアジアの経験を具体化する動きである。

また、ザンビアではマレーシアと協力して外資誘致のための投資環境整備が進められている。周知の通り一九五七年に独立したマレーシアの経済は一次産品輸出に支えられたモノカルチャー経済であったが、第一次輸入代替工業化と輸出促進のダブルトラック方式による工業化を図り、労働集約型輸出産業の育成とFTZやEPZによる外資誘致による外資主導型輸出工業化を成功裏に収め、工業国として電子立国となった。ザンビアはマレーシアの成功体験を自国の工業化に生かそうとしている。

こうしたアジアとアフリカの経済交流は二〇〇三年第三回アフリカ開発会議で提唱された「アジア・アフリカ協力」、「経済成長を通じた貧困削減」の具体的な動きにほかならない。筆者は一九九〇年代初め世界銀行勤務時マレーシアやインドネシアの門戸開放による輸出工業化の経験をアフリカ諸国に伝えるためインドネシアからアフリカ諸国に専門家を派遣する事業に関係したことがある。アジアとアフリカはかつて植民地であり、ASEANの経験は一次産品輸出国であるアフリカ諸国の経済政策立案に大

“ハンゲル語”

今から四年前のことである。オムニバス科目である『アジアを知る十二章』でいつもの如く言語で見るアイデンティティ…朝鮮半島を講じた。講義後学生が書いた「講義概要」を読んでいたところ、ある主張に目が留まった。韓国人留学生が書いたもので、そこには「ハンゲル語で良いと思います。韓国語も朝鮮語も漢字語ですから」と書いてあった。

筆者は講義の中で、朝鮮半島に住む人々が使う言語について韓国語と朝鮮語という呼称がある、現在の韓国では韓国語、北朝鮮では朝鮮語という呼称が使われている、戦前は朝鮮でも日本でも呼称は朝鮮語一つであったが、今の日本では韓国との関係の深まりもあって韓国語という呼称が優勢である、ハンゲル語という呼称を見かけるが、これは日本語をひらがな語と言つのに等しく、韓国人に対し失礼である



から使わないように、と話していたのである。それ故、上記の韓国人留学生の主張は筆者にとつて驚きでもあった。しかしよく考えてみると、留学生の

主張には「なるほど」と思わせるものがあった。ハンゲル語の使用は愛国でもあるからだ。韓国がハンゲル(訓民正音)という民族固有の文字を持つに至ったのは十五世紀半ば、朝鮮王朝四代目の世宗が学者に作らせたものである。民族が独自の文字を持つことはその民族の主体性、文化の独自性を確立することでもあり、慶賀すべきことでもある。日本がひらがなを持つに至ったのが九世紀半ばであることと比較すると、六〇〇年の遅れがある。それだけ韓国では陸続きの中国からの文化的影響が強かったことが感じられる。

解放後南北朝鮮とも言語政策ではハンゲル専用化政策が採られた。漢字使用は「事大主義(自主性を欠き、勢力の強大な国に付き従うさま)」という受け止め方が強かったからである。特に事大主義排撃を政治的信念とする朴正熙大統領の時代には、一時期ではあるが小学校から高校までの全教科書から漢字が完全に追放された。現在韓国では漢字は中学校で九〇〇字、高校で九〇〇字が教えられている。文章も一応国漢文併用(ハンゲル漢字混じり文)になっている。

しかしそれはあくまで建前で、韓国の新聞や雑誌を見ればすぐに分かるように、漢字は殆ど見当たらない。IT革命で英語教育強化論の強まりもあって、漢字はますますその存在感を無くしている。金大中政権時代に道路や駅名に漢字表記も併用されるようになったが、焼け石に水の感がある。副作用が色々指摘されつつも、ハンゲル専用化の流れはますます強まっているようだ。(野副伸一・アジア研究所教授)

大きく貢献することになる。

4、道半ばのミレミアム開発目標

国連ミレミアム開発目標(MDGs)が二〇〇〇年の国連ミレミアムサミットで採択された。アジア・アフリカの南々協力が着実に拡大する中、サブサハラ以南のアフリカ諸国が国際貿易金融資本構造の変化に伴い経済成長してきているとはいえず、アフリカ諸国の生活の質の改善と貧困問題は依然としてアフリカ諸国が抱える大きな課題である。MDGsでは一九九〇年水準を基準に国際社会が二〇一五年までに五歳未満の幼児死亡率を三分の一に削減する。飢餓に苦しむ人口を半減する。すべての子供の初等教育就学を実現するなどの八項目を掲げている。

しかしアフリカ地域では経済成長を開始したとはいえず、貧困削減やエイズ撲滅などの目標達成は遅々としている。一日当たり一ドル未満で生活する人々は九億人以上いると推計され、その大部分がアフリカ諸国に集中している。トイレや飲み水に不自由しており、サブサハラ以南の人々の大部分はこの絶対的貧困水準での生活を強いられている。経済成長の成果が保健衛生や教育などの生活の質の改善やインフラ整備に波及していくことが望まれている。

アフリカ諸国は経済成長の果実を享受する一方、中国などのアジア諸国と同様に格差社会に入りつつあるといえる。

この外イジウム、希土類、ニオブ、タンタル、ストロンチウム、カリウムなどがある。(みきとしお・札幌学院大学経済学部教授)